

1-3-13-5 金龍神社建設の歴史

①高山城内の黄金神社

金龍神社は、飛騨を平定し、飛騨の国主となった戦国武将金森長近公を祀る飛騨で唯一の神社である。長近は飛宮川の東岸にあった天神山古城跡を選んで、新たに城を築き、後に高山城内に「黄金神社」を祀った。黄金神社の主神は金山毘古神、金山毘売神で、その後、鉾山の功労者茂住宗貞、宮島平左衛門を相殿に合祀した。この金森時代における黄金神社の位置は高山城内にとあるだけで、位置はわからない。

幕領となってからは、延享二年（一七四五）古城跡に宮島平左衛門の霊を慰める「宮島霊神」を祀ったとある（『飛州志』）が、その場所は特定できない。明和年間（一七六四～七二）、八賀町（現丹生川村）の渡辺伊兵衛が二之丸に小祀を設け宗貞の霊を祀ったとある（『紙魚のやとり』）。ここで初めて二之丸の場所が出て来る。

文政二年（一八一九）三月二日、一之町大阪屋太右衛門らが、二之丸の小祠が落ちぶれているので、堀の北面平地に再興したいと御役所へ願い出たが、新祠を建てることは許されず、翌年堀の上に祠を建て金の神祭（五月四、五日）を執行したとある（『紙魚のやとり』）。この祠が、古祠で、覆殿のみを新築したものと思われる。この時に、堀端町側（東）へ向いた社殿となった（第二一図）。本社が東に向いていることは、知られていなかったことである。安政年間～明治初年には銀絞吹所の守護神となっていたことがある。

明治になってからは、明治五年拝殿修理のため、社内杉の木三本と、水無神社の古神楽殿をゆずり受けて建替えたとある（里正日記）。明治十二年、神宮教中教院大講堂が創建された（忠孝苑大神宮）のを機会に翌十三年二月、大講堂の東側に社殿を移築した。この時、覆殿、拝殿は取り壊されたが、本社はそのまま移転した。

以上、流れをまとめると、①慶長年間、鉾業開発祈念のため勧請された＝黄金神社、金山一、②直轄地時代は平左衛門の霊を慰める＝宮島霊神、③文政三年「金の神」として堀の上へ移築＝金之神、④安政年間～明治初年銀絞吹所の守護神＝黄金神社、⑤明治十三年、中教院創建により現在地へ移築＝黄金神社

現在の黄金神社（PL 三四～三六）は、ケヤキ造りの、非常に出来の良い社殿で、覆屋の中で大事にされてきた建物である。建築年代は専門家の判断を待ちたいが、文政以前の可能性もある。高山城内に残る数少ない確かな建築物であり、重要である。『高山城跡発掘調査報告書 III』

②高山城内の東照宮

元和2年（1616）4月17日、徳川家康が75歳で亡くなり、3年後の元和5年4月、金森3代重頼は高山城中に東耀山御宮（当時はこのように呼んだ）を

勧請（神仏を招きまつること）した。これは徳川御三家並みの早い対応で、外様大名としては異例のことだった。

ところが元禄5年（1692）、領主金森家は幕府の命により、山形県上山へ転封となる。東照宮も神号碑（東照大権現と刻まれた石碑）1基を残して金森と共に上山へ移った。金森家は元禄10年（1697）、美濃国郡上八幡へ再び国替えとなり、東照宮も再移築している。

『金森家家説類聚』に「郡上惣鎮守八幡宮相殿に東照宮の靈櫃ましますなり、是は飛州にて重頼の代寛永五年御宮造営ありし時の神躰也」と、元文5年（1740）の記録がある。

宝暦8年（1758）、金森家は世に郡上一揆の責めにより改易、断絶され、家臣もお役御免となった。翌年、飛騨出身の旧家臣たちは国元^{くにもと}へ戻ったものもいて、東照宮も共に帰って来たと思われる。

③東照宮の再建

その後、松泰寺住職を兼ねていた八幡長久寺の良賢法印（桜山八幡宮の別当職）が東照宮修復を発案し、時の榊原郡代と、それに続く第18代飛騨郡代・芝与市右衛門正盛に願い出て、自ら江戸へ足を運び、この時すでに復興を許されていた金森家子孫を始め、幕府の要所へ東照宮再建を願い出たのですが、なかなか聞き入れて貰えないまま、わずか32歳で亡くなります。

しかし、良賢の願いはかなえられ、良賢の代わりに実務に当たった内山忠右衛門知澄^{ともすみ}（薬種商、歌人）らの努力により、東照宮造営事業は一気に進められることになった。

東照宮再建事業のあらましは、田中大秀翁の『東燿山御造営日記』にくわしく書き残され（原本は飛騨高山まちの博物館にあり、その写しが東照宮に残る）、東照宮を知る上で貴重な資料となっている。

文化13年（1816）11月26日、東照宮再建の許可があったと、江戸の金森家（旗本になって再興されている）から連絡が入り、翌文化14年正月早々、良賢法印に代わった内山忠右衛門が江戸に出向き、金森家などとの打ち合わせをして帰り（2月16日）、早速、芝郡代に報告、4月の初めには造営に当たるための諸役・係も決められ、宮地見分（実際に現地を見ること）も行われた。

当時の東照宮敷地は場所が狭く、便利も悪いので、南の方へ移すことに決まり、更に作事方も決められ、地ならしから工事が始められた。

4月に入り、朱塗りの大鳥居が建てられ、15日、新宮（しんみや）への神移しは「まだほの暗き中で、神輿に奉りて据え奉る。中段御庭に四神の銚をたて、頭（かしら）に其のかたち（青龍、白虎、朱雀、玄武）を彫りたるをすゑ、幡（はた）には葵の御紋を附（つけ）て、其分（そのぶん）に合う色（青、白、赤、黒）に染めたるなり」と、現在、高山市文化財となっている四神旗を初めて立てた様子も書き残されている。

この時、元禄5年から、旧東照宮跡に残されていた東照大権現の石碑が新しい本殿の床下に建て替えられた。本殿正面からはまったく分からないが、本殿

裏の隙間から、そっとその石碑の裏を確認することができる。

東照宮の整備はその後も続けられ、文政2年、手水舎が造られた。手水鉢は塩屋から大持引きによって運ばれた大石を刻んだもので、手水舎の天井には龍の絵が描かれているが、今はよほど気を付けて見ないと、ほとんど分からない。最初は神橋（太鼓橋）を渡った石段の下に据えられていたが、昭和に入って現在地に移された。

④松泰寺も建て替え

一方、東照宮大造営に併せ、松泰寺建て替えの評定も行なわれ、早速、地ならし（現在の東照宮社務所、内神殿敷地）から始められた。

当時の松泰寺は、現在、東照宮社務所となっている部分の西側山裾に位置し、庫裡は寛保3年（1753）、客殿（本堂）は寛延3年（1750）建築との記録が残されている（松泰寺第4世住職堯光法印の時代）が、築後年数は浅かったものの位置も手狭であり、敷地を広めて建て直されることになったようだ。

敷地の造成工事中、地下2間（約3.6m）ばかりのところに広さ1坪（3.3㎡）ばかりの岩窟が掘り出され、中から銭3つ（寛永通宝）と鏝1連が見つかったと書き残されている。

建築用材は、宮、片野、塩屋、江黒、池本、有巢などから伐り出され、敷石、石段などの石材も全て近くの村々から集められた人々の手（大持引と言った）によって運び込まれたため、時によって振る舞われた赤飯の包みを2,000食準備したのに、ほとんど余らなかったとも記されている。

工事が進むにつれ、東照宮への道の修理も行われ、苔川の玄興寺橋西詰から惣門までおよそ280間の道を幅6尺と定め、西之一色村人に請け負わせた。

⑤金龍神社を東照宮跡地に建設

祭神・金森長近公 文政1年（1818）金龍神社竣功

金龍神社は、東照宮の移転大改修を行った芝郡代が、長近公の法号にちなむ金龍大権現の神号を得て東照宮の旧社地下段（添付図⑨の位置）に勧請したのが始まり。東照宮の移転大改修の行われた年の秋（文政元年）、芝郡代が神祇官吉田司家へ願い出、金森長近公の

法号（法名） 金龍院殿前兵部尚書さきのひょうぶしょうしょ法印ほほういん要仲素玄大居士ようちゅうそげん

にちなむ金龍大権現の神号を得て（吉田司家占部良長の名による神号軸が東照宮にある）、旧東照宮の下段を造成し、新社殿を建て、遷宮祭は9月17日に行われた。町方の各組頭は袴にて罷出、翌日は放生会（ほうじょうえ生きた鳥や魚などを放ち、自然への感謝を表す儀式）が行なわれ、町方各組より鳥1羽ずつ集められ、また若者たちによるすもう角力大会も盛大に行われたことが書き残されている。祀られた当時は、御役所や町方旦那衆によって大切に護持されたが、社運は衰退していった。

歴代の郡代と町年寄など高山町方旦那衆の財力に支えられてきた東照宮と金龍神社にとって一大転機となったのが明治維新。徳川幕府の崩壊と神仏判然令（廃仏棄釈）である。飛騨郡代の廃止と松泰寺の廃寺が、東照宮、金龍神社共に支援者を失うことになった。

明治 2 年、金龍神社は東照宮と共に西之一色村へ移管されたが、当時西之一色には鎮守神 3 社（山王・八幡・熊野）があり、わずか 50 戸たらずの村民が地域を分けて氏神としてきたが、突然東照宮神域全体の護持を委ねられた。明治 41 年、旧氏神 3 社は全て東照宮へ合祀されましたが、金龍神社はそのまま末社として存続された。

大正 10 年（1921）頃、高山の町方有志が城山公園金龍ヶ丘へ移すことを話し合ったようで、当時、西之一色に家のあった押上森蔵氏が次のように書き残している。「飛騨の有志が、金龍神社を高山城跡へ移さんとの議ありと、誠に当然の事にて其の企の遅きを遺憾とす。1 日も速やかに実現せん事を欲す」と。しかし、実際には責任をもってまとめる者はなく、そのままとなった。それどころか、昭和 15 年秋に台風によって荒れた社殿が裏山へ落ちてしまった。

⑥金龍神社を境内山裾に建設

昭和 15 年、東照宮社司となった熊崎義親氏がこの事態を憂い、再建をめざして行動を起こした。氏子総代の多額の醸出金（熊崎社司の懐古）を基に、高山市長森彦兵衛氏を会長とする金龍神社奉賛会を設立したり、全市町内会長を通じた浄財の寄付を依頼することにより、現在地への移転再建事業が始められたのである。

移転再建とはいえ本殿は、旧氏神の一つ山王社の社殿で東照宮へ合祀された際高山の旧家買い取られ、解体保存されていたのを買い戻したもので、遷座祭は昭和 17 年 9 月 2 日に行われた。

引きつづき旧松泰寺山門を移転して神門とし、新たに玉垣を設けて神域を整え、事業の完成奉祝祭が翌 18 年 8 月 7 日に行われたが、長近公の遺品（鎧、短刀、鞭など）を寄付した金森家後裔の参拝もあって、遺品展が開催された。以後しばらく経って本殿、神門の屋根葺替と玉垣を含め全体を朱塗りにし、創建時を再現して現在に至っている。

戦災にあうこともなく、昔のたたずまいを引きついだ高山市は、今や世界的著名な町になったが、その基を築いた金森時代の再評価は益々盛んとなり、昭和 56 年、市民有志による金森公顕彰会が設立され、城山に銅像の建立、顕彰会の法人化、領国 400 年記念事業の開催など活発に進められた。

金龍神社も昭和 61 年、金森領国 400 年の記念大祭 400 年記念大祭と遺品展（社宝展）を開いたり、毎年 9 月 1 日には東照宮氏子による金龍神社例祭を欠かさず、その夜は西之一色町内会合同で松泰寺盆踊りを催すなど、東照宮氏子によって金龍神社の護持がなされている。

平成になって、金龍神社奉賛会が、蓑谷穆高山市観光協会長らの努力によって組織され、営繕事業協力金も積み立てられるようになった。その協力も得て、平成 17 年には金龍神社社殿の修理や境内整備が行われ、平成 19 年 9 月 2 日、金森長近公遷御 400 年祭が行われた。

*引用文献

『むかし噺 西之一色』編著・発行人 竹ノ内信三 2014年発行」より

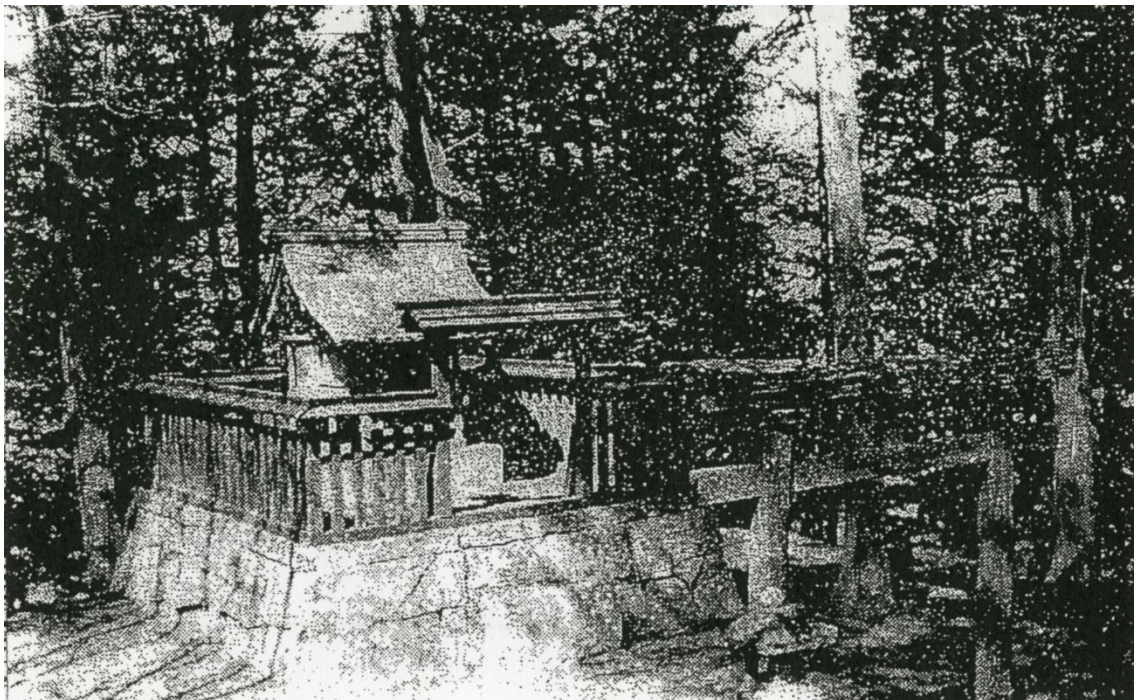
*その他参考文献

「金龍神社考『飛騨高山の四季』第40号 平成13年1月1日発行 飛騨東照宮責任役員 竹ノ内信三」

『金龍神社再建誌』

高山市教育委員会編集『高山城跡発掘調査報告書 III』高山市教育委員会発行平成八年

第2期 ^{きんりゅう}旧金龍神社（金龍神社の御祭神 高山市始祖金森長近公）



金龍神社 大正10年ころ

現・朝日稻荷宮（旧本地堂）下
（今は空地になっている。）